研究課題

心を育てるICTを活用した授業

副題

～心を揺さぶる資料の吟味と提示の工夫～

学校名	札幌市立緑丘小学校
所在地	〒064-0810 札幌市中央区南10条西22丁目3-1
ホームページアドレス	http://www.midorigaoka-e.sapporo-c.ed.jp/

１．はじめに

本校は、研究助成を受けて３年目となる。１年目・２年目は「問題を生み、意欲的な言語活動を促すICTを活用した授業」というテーマを掲げ実践を積んできた。これまでの取り組みの中で、ICTの活用は子どもの五感に働きかけることができ、追求意欲を引き出す上で有効な指導方法であることが明らかとなった。

これまでに明らかになった以下の活用の有効性を生かしながら、今年度の研究に取り組んでいきたいと考えている。

ICT活用の有効性

- **写真や現物を大きく提示できる（じっくり観察）**
- **映像で一連の動きを提示できる（迫力・現実味・疑似体験）**
- **プレゼンソフトを利用したグラフなどで、変化や量を具体的に提示できる**

２．研究の内容・目的

本研究は各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動（以下「教科等」とする）を通して、「子どもの心を育てるICTを活用した授業」を目指す。教育の目的は、「確かな学力」と「豊かな人間性」の育成と考えることができる。この目的に向かい、教科等の研究を通して「学力」の獲得だけにとどまらず、人間性（心）をＩＣＴを活用することでより育んでいく。

では、育んでいく「子どもの心」とは、どのようなものか…「強い心」「優しい心」など、教育に於いて育みたい「心」は多岐にわたるが、以下の２つの「心」に焦点をあて本研究を進めていく。

○　学ぶ意欲	…「やってみたい」「分かりたい」などの「～たい」を感じる心
○　仲間との繋がり	…　他者を受け入れ、尊重する心

【「やってみたい」「分かりたい」などの「～たい」感じる心】

これらの意欲は学びを進める原動力となる。子どもが「もの・こと・人」と出あった時に感じる驚きや疑問をもとに「～たい」を生むのである。追求意欲や知的好奇心に支えられ、自らの手で学びを推し進める子どもは、学びの過程で達成感や成就感を得ることができると考える。

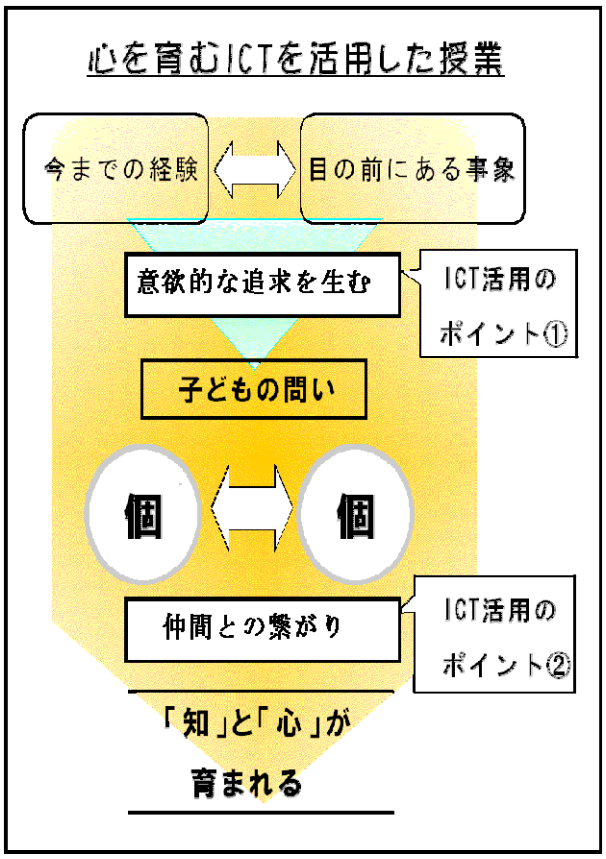
【他者を受け入れ、尊重する心】

グローバル化が叫ばれている現在の社会において、自らを表現し、他者を尊重して受け入れていく心は今後ますます重要となってくる。ICTを効果的に活用することによって、他者との繋がりを活性化し、学びを深めたり広げたりするとともに、仲間と共に学ぶ意味や価値に気づかせていきたい。

３．研究の方法

道徳の授業はもちろん、各教科等の授業においてＩＣＴを活用して「心」を育んでいく。

「学ぶ意欲」を育むために、子どもの内面にあるこれまでの生活経験や既習経験をもとにした思いと、事象のもつ意味とを比較し、その間にズレが生まれる場を構成する。比較によってズレが生まれ、心を揺さぶられた時、子どもは自ら追求を始める。そして、事象と自分とのやり取りの中で、新たな価値に気付いていくのである。



このズレを生むためには、「心を揺さぶる事象」の提示が不可欠である。

提示する事象に、①子どもの思いとのズレはあるか。②自分自身を見つめ直す価値はあるか。③教科等のねらいを達成できるか。これらの観点で事象を吟味し、さらに「心を揺さぶる事象」との出会いをどのように演出するのかもあわせて考え、ＩＣＴの効果的な活用の在り方を探っていく。　**→ICT活用のポイント①**

また、「他者を受け入れ、尊重する心」を育むためには、個々の思いがお互いに共有できる交流を目指し、ＩＣＴの効果的な活用の在り方を探っていく。

例えば、実物投影機を活用して友達のノートを写して他者に考えを伝えたり、見せたい対象や見せたいポイントを拡大し思いを伝えたり、個と個を繋ぐ１つの方法としてＩＣＴを活用していく。

→ICT活用のポイント②

これらの２つの観点で、各教科等の特性を見失わず研究に取り組み、「ICT活用のよさ」を最大限に活かし「心」を育んでいきたい。

さらに、本研究で大切にする２つの「心」は、「学ぶ意欲」が「他者との繋がり」を求めたり、「他者との繋がり」が「学ぶ意欲」を高めたり、これらは相互に絡み合って育まれていくものだと考え研究を進めていく。

４．実践より

◇◆　６年道徳　題材名「生き物を飼うこと」　◇◆　　…　　ICT活用のポイント①

（１）映像を核とした題材構成

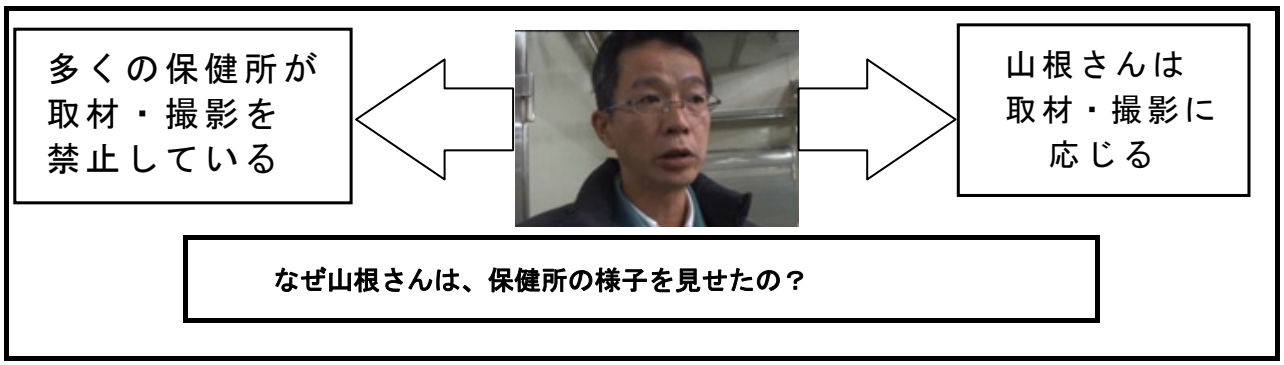
「命は大切」と言うことは、言葉では理解していても実感を伴ってその大切さを感じたり、具体的な例から考えたりする機会は少ない。学級の大多数の子が生き物を「飼う」生活経験をもっているが、ペットの「死」に直面した経験は少ない。

一方で、八千億市場といわれるまでに成長したペット産業の陰で、３０万頭以上の犬や猫が、毎年殺処分されている現状があり、その実態や保健所の役割についても考える機会は少ない。そこで本実践では、映像資料を効果的に使って、殺処分をしている人の思いに焦点を当て学習を進めていく。本来、命を救うべき獣医師でありながら、保健所で犬や猫の処分にかかわっている山根さんを例に取り上げ、仕事への願いや思いを考えさる。怒りや悲しみ、やりきれない苛立ちの中、それでも「一匹でも多くの生き物を救いたい。」という強い思いがあることを、山根さんに寄り添うことで気付かせていく。そして「生き物を飼う」ことの意味や、飼う側の責任から「命を大切にする心」を育んでいく。

（２）映像をもとに問題を生み、子どもの追求意欲を喚起する

映像資料「犬と猫と人間と」を見せ、多くの保健所が取材・撮影を禁止している事実を知らせ、その理由を考えさる。その一方で、徳島の動物愛護センターで働く山根さんは、保健所の撮影・取材に応じてくれたことを伝え、実際の保健所の殺処分の流れがわかる映像と写真を提示する。

本来、取材や撮影が禁止されているのに「山根さんはどうして、保健所の様子を見せてくれたのか？」事実の関係を対比して扱うことで子どもの心は揺さぶれられ、山根さんの行為に不思議さや疑問を感じる。そして、保健所の様子を伝えた山根さんの行為を問題とし、その意味について意欲的に考えていく。



話し合いでは、山根さん立場から「自分勝手に捨てた飼い主にこの事実を知ってほしい。」「この実態を知って。少しでも捨て犬が減ってほしい。」など、職員としての責任や使命感からの発言が出された。さらに、取材を拒否した保健所と対比させながら「動物が殺される辛い場面を山根さんだって本当は見せたくないはず。」と、自分と対比させながら「写真を見ただけで自分は苦しかったのだから、山根さんはもっと…」といった意見がだされた。考えを交流する中で、様子を「見せた」という事実に改めて向き合った子どもは、「一匹でも多くの命を救いたいという強い思いがあるからこそ、辛くても処分の様子を見せてくれたんだ。」と考えに至った。

今回の実践では、一般的な保健所と徳島愛護センターを映像で比較することによって、子どもの心は揺さぶられ、追求意欲の高まりが見られた。映像を効果的に活用する事象提示が、子ども自らが山根さんの意図を考える姿や、他者の考えを求める姿を生んだのである。

さらに、この実践を通して心の基盤である「命」について改めて考えることができたことも、大きな成果といえる。

◇◆　５年音楽　題材名「川のイメージから音楽をつくろう」　◇◆　…　ICT活用ポイント②

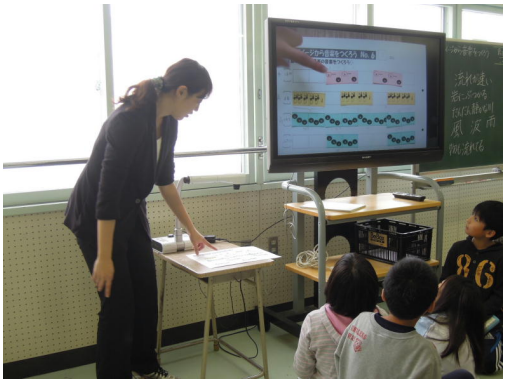
【実物投影機を使いイメージ図や楽譜を提示することで思いを共有する】

単元のはじめに川の写真を実物投影機を使って提示する。そのイメージの交流や、川の音や川を表現した音楽を聞く鑑賞活動を入れ、自分たちの川のイメージをさらに固めていく。

単元全体では、川の様子を３つの場面（「静かな流れ」→「激しい流れ」→「オリジナル場面」）で構成した。授業ごとに場面を限定したり、楽器や旋律、小節を限定したりすることで「音楽の要素」にも着目し、それを工夫しようとする姿を生み出していくことをねらった。

本時は川のイメージ図をつくり、実物投影機でその図を見せながら激しい流れの場面」を演奏した。子どもは、「川の流れ」だけではなく、そこに出てくる「魚」や「風」「雨」なども表現しようと工夫していた。

前段の交流の場では「この音は魚が跳ねている様子を表していて…」「雨がたくさん降っているから…」など、イメージ図と照らし合わせて語る姿が見られ、どんな思いから工夫をしたのかを全員で共有することができた。



演奏を発表し合う全体交流では、イメージ図の提示にあわせて、楽譜を全体に見せながら演奏の工夫を伝えるグループも見られた。ＩＣＴ機器の活用により耳から入る演奏と、視覚で捉えた図や楽譜が合わさり、グループごとの工夫をお互いに感じとる姿を生み出すことができた。

さらに、ＩＣＴを活用することにより、発表者の意図を的確に捉える事ができ、他のグループの工夫を自分たちの演奏にも役立てようとする姿も見られれた。

グループとグループ、人と人を繋ぐ役割として、ＩＣＴが効果的に活用された実践といえる。

５．研究の成果と課題

（１）ＩＣＴ活用により、確かな学力と共に心が育まれる

ＩＣＴの活用した「心を揺さぶる事象提示」により、子どもは「問い」をもち「～したい」という意欲のもと、自ら学びを進めてく姿を生み出すことができた。この「～たい」があるからこそ、学びにおける自己実現を可能にすることができ、分かったときやできたときの達成感や成就感など、学びの感動を得ることができたのだと考えられる。

また、授業のねらいを学力の獲得だけではなく、授業を通して子ども同士の人間関係（仲間）づくりにおいてもＩＣＴの活用は大変有効であった。それは、ＩＣＴの活用によって言葉だけではなく、視覚からも情報が得られることで友達の考えを理解し、共有することができたからである。このような学習の積み重ねが、豊かな人間関係を築き、子どもの心を育てていくことにつながると考える。

今後も各教科等の特性を見失わず、ＩＣＴ機器を効果的に活用し、子ども自らが「～したい」という気持ちを持続・発展させながら「人・もの・こと」に関わり続ける姿を求めていきたい。

（２）　実践集の作成と実践データを共有化により、ICTをより日常的に…

１年間（２４年度）通して積み上げてきた実践、さらには過去２年間の実践をもとに、実践集を作成した。そして、いつでも誰でも追試可能な状態にするために、指導の流れはもとより、授業で使った提示物（静止画・動画・プレゼン）や学習シートなどのデータ化を行い、使える環境を整えてきたことも大きな成果と言える。

（３）　心を育む授業作りの原点は、子ども理解と教材化

ＩＣＴを効果的に活用する前提として「子どもの実態を捉えること」や、「指導内容の本質を見極め、教材化を図ること」が重要となってくる。教科等のねらいに向かうために「どんな資料を提示するのか。」「どんな映像を見せるのか。」「どの部分をクローズアップして伝えるのか。」「誰のノートを見せるのか。」「どのタイミングで見せるのか。」など、提示資料の内容の吟味とともに効果的な提示の仕方など、子どもの姿をしっかりと想定した上で、学びの過程に効果的に位置づけていくことを今後も大切にしていきたい。

ＩＣＴの活用が目的となるのではなく、各教科等のねらいに向かう一つの有効な方法として活用し、子どもの「知」と「心」を育んでいきたいと考えている。